

工芸・民芸

天草土人形

人形の起り

窯元であった広田家の記録や言い伝えによると、江戸時代の中期、享保2年（1717）、唐津藩出身の浪人、広田和平が、新休村の東向寺の屋根瓦の葺き替え工事のため、門前に瓦焼窯を築いたが、瓦葺き替え工事終了後もこの地に留まり、東向寺の参道で茶店を出して生計を立てるようになった。その傍ら、持ち前の器用さを生かして仏像作りをはじめた。後に、土人形を作るようになったという。

初に、型を打ち出した片面に大黒さんなどを作り、次いで人形の両面を接合した大黒さんを作っていたと思われる。これが天草土人形の起源といえる。



広瀬川流域一帯は、人形製作に欠かせない良質な粘土を多く産出し、広田家の生業を大いに助けた。また、水の平・箱の水・丸尾・広瀬など窯元も多く、陶器類の焼き物づくりが盛んに行われるようになった。

天草土人形の型作りや彩色など製法をみると、全国

各地の土人形と同じく、京都の伏見人形の流れをくむことがわかる。

また、幕末から明治にかけては、当主が佐賀弓野や博多の土人形屋で修行しており、その影響を強く受けている。

広田家は「人形屋」の屋号で知られ、最盛期には、近隣より人手を頼んで製作するほどの盛況ぶりであった。

四代目、利八の頃には、九州一円まで販路を拡大し、天草土人形の最盛期を迎えた。

天草土人形は、島内の町や村々の店へ馬車で送られていた。本渡周辺では、竹籠に入れ、担って行商をしていたという。

人形の役割

天草土人形は、ひな祭りや端午の節句などのお祝いの贈答品や部屋飾りとして島民に親しまれてきた。

女の子には「内裏雛」「山ン姥（山乳母）」「舞女」、男児には「金時」「武者人形」「加藤清正」などに人気があった。

広田家の言い伝えによると、土人形は元々「壊すために作られた人形」だったという。このためもろい素焼きの人形で、着色も背面は省き、安い値段で売られていた。

節句飾りが終わると子供のオモチャとして与えられ、自然に壊れていった。これは、流し雛などとも共通する節句本来の行事で、ヒトガタ（人形）に災いを転じて祓い清める呪いの一種で、古来の形をとどめているようだ。

また、「山ん姥」「大黒」「弘法大師」「福禄寿」は、大江や崎津などでは、隠れキリシタンの仏像として聖母像やキリスト像になぞらえて祈られていたという。

「天草崩れ」といわれる幕末の隠れキリシタン発覚事件においては、土焼きの人形が多数押収されたことが、上田家文書に記録されており、何らかの人形が多くの家で拝まれていたことがわかる。

種類は、恵比須・大黒・山ん姥と金太郎・福助・高砂・松風娘・男三番叟・女三番叟・福禄寿・金時斧持ち・浦島・児雷也相撲取り・鈴木三神・加藤清正・弘法大師・舞女・内裏雛・武者人形・貯金玉など百種を超えた。

人形の特徴とその変遷

初代 和平 ~元文3年(1738)

二代 金蔵 ~文化14年(1817)

生業の余技として仏像や置物、大黒天などを作った。初期のものはレリーフ状の片面だけで、後に型を合わせた像を作るようになった。



天草各地の家々には神棚に大黒天が祀られているが、このような需要に応えていたものと思われる。

三代 政吉 ~明治12年(1879)

若い頃熊本で修行したと伝えられる。伏見人形と共に通した型が多いが、きわめて薄手に作られ、高温で焼成された高い技術の作品が多い。顔料も上質のものを使用し、描彩に軽妙な筆使いが見られる。顔面も丁寧に磨きがかかったものが多い。

四代 利八 寛永2年(1849)~大正11年(1922)

天草土人形の全盛を築いた。若い頃、博多で人形づくりの修行によって習得した型や技法を導入し、種類も多く、品質的にも技術的にも完成された製品になっていった。

この時期には、天草にも弓野人形が大量に送り込まれ、同一の型も多く、市場競争も激しくなったものと思われる。

五代 富造 明治15年(1882)~昭和27年(1952)

六代 力造 明治22年(1889)~昭和48年(1973)

天草土人形が大量に生産された頃で、一日に客馬車6台分を出荷しており、当時1万円を売り上げる繁盛振りであった。

生産が間に合わず、中には、型くずれのものをそのまま使ったり、人形の付属部分の一部を削除したり、かなり厚手で低温で焼かれている。時代が下るほどこの傾向が強く、描彩も大まかで質が低下していった。

七代 元一 大正15年生(1926)

戦後の混乱と庶民の生活困窮が災いし、経営不振に陥った。昭和24年頃、再興をはかったが、虚礼廃止や新生活運動が叫ばれ、経済情勢が低迷する中での生産は思うに任せなかった。

作風は、本来伝統的な色使いではないが、濃い水色を主色に使った作品が多く、所々に白い小菊模様が描かれているのが特徴である。

お土産物として、原型の「山ン姥」を小型化して作ったりもしたが、需要が伸びず、天性の美術的な才能を持ちながら人形作りは廃業の止むなきに至った。

天草の代表的な民芸品として「天草土人形」の復活が強く望まれていたが、残念ながら実現を見なかった。(昭和26年廃業)

幸いにも、人形の型 枠^{かたわく}はすべて当家に保存されている。

竹細工

本町の竹細工は、250年以上の伝統があり、宇土の仲右衛門がしょうけ作り（竹細工）を始めたといわれる。

「木六竹八」と呼ばれるように、竹の伐採時期は陰暦の8月以降が最も良いとされているため、この時期に真っ直ぐに長く伸びた素性の良い用材を大量に蓄え、これを加工している。

昭和30年代まで生活用品、農工具として広く使用されていたが、現在では科学製品の普及により需要が少なくなったが、質の良い真竹を素材にした「天草竹細工」は、県の伝統工芸品として指定を受けている。

代表的な製品は、一斗じょうけ・こまじょうけ・飯じょうけ・柄付けじょうけ・自籠^{じごろ}・手籠^{てごろ}・花籠^{かいにかご}・蚕^{かい}籠などである。また、醤油を作る過程で 醬^{もろみ}を濾過するために醤油手籠^{じごろ}を用いた。実用性と優美さを兼ね備えた手作り工芸品として有名である。

五代、多吉には多くの弟子がついた。大正11年、その弟子たちによって「記念碑」が建立されている。

八代目貞由は、卓越した技術が認められ物産展において金賞を受賞、その他数回にわたり表彰を受けた。

九代目窪地成俊氏は、昭和57年、熊本県伝統工芸継承者として認定され、各地で実演や実技指導に当たっている。

※「しょうけ」は、古語の「籠」^{そうけ}のことで竹籠^{ざる}を指して云う。



制作中の窪地成俊さん